概説：ムリッド教団（1）：セネガル共和国の社会経済理解に向けて|The Mouride brotherhood(1): Toward the comprehension of the socio-economic system of the Republic of Senegal

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Masaki, Toyomu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/34334

概説：ムリッド教団(1)

―― セネガル共和国の社会経済理解に向けて ――

正　木　　響

目　次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．西スーダン地域のイスラーム化とウォロフ社会
　Ⅱ．1　西スーダン地域のイスラーム化
　Ⅱ．2　ウォロフ伝統社会の社会階層構造とイスラームの浸透
　Ⅱ．3　19世紀：ウォロフ社会に対するフランスの侵攻とスーフィー教団の興隆

（続く）

Ⅰ．はじめに

合理的な個人を想定して構築された経済理論は，経済がなぜうまくまわっているのか，もしくはうまくいかないのかを理解する際の手助けとなるが，特定の地域社会経済を包括的に理解するにあたって十分ではないことに異論はなかろう。各地域には，長い歴史をかけて形成された制度，慣行，組織が存在しており，それらが具体的な地域経済社会の経済取引や人々の行動に大きな影響を与える。人々の行動は，長期的・包括的には合理的に説明可能なもののはずであるが，部外者に馴染みのない慣行や組織の存在が，内部の人にとっては合理的な行動メカニズムを覆い隠して見えなくしてしまうこともある。

筆者がセネガル共和国に初めて足を踏み入れたのは2002年９月のことであった。専門に掲げているCFAフランの成り立ちを調査するために，フランスと西アフリカの歴史関係を調べる必要があるとの思いで，かつてフランス領西アフリカ（L'Afrique-Occidentale française：AOF）の首都が置かれていたサ

ンルイと首都ダカールにある公文書館を訪問することが目的であった。筆者のフィールド経験は他のアフリカ研究者に比べて少ないことは否めないが，そうした限られた経験からしても，明らかに奇異に感じることがあった。汚れた服を着た年端もいかない子供たちが集団で，大人や外国人，そしてレストランやカフェで金銭や食べ物の物乞いをするのである。中には，明らかに３－４歳とみられる子供も含まれていた。旅行者に小銭を求めるストリートチルドレンの姿は途上国では珍しい光景ではない。しかし，セネガルのそれは明らかにこれまでに経験したことのないものであった。第一に，物乞いをする子供の数が極めて多かった。次に，それぞれが小脇に大きな空き缶－セネガル料理で不可欠なトマトソースの空き缶であることが多い－を抱えるなど，明らかに組織的に行われているようであった。そして小銭を要求されるのは朝と夕方など特定の時間帯であることが多く，それ以外の時間に道で会っても遊びに夢中で無視されることも少なくなかった。また，物乞いをする子供の集団に女児をみることはなく，物乞いをするにしても，生きるために必死というよりは，どことなく遠慮深げに金銭や食べ物を求める子どもも少なからずいた。生まれてくる子供の男女比はほぼ同じであることを踏まえるならば，物乞いをしないと生きていけない子供が男児に偏るのは不可解であった。

彼らはタリベと呼ばれ，何等かの事情で，スーフィー教団に属するクルアーン学校の指導者マラブーに預けられた子供たちであり，筆者が物乞いと理解した行動には修行の要素が含まれており，この経験を通じて，子供たちは人に何かを頼むこと，そして自分を助けてくれる他人に感謝することを学べるのであるといった教育的意義や[1]，セネガルの95％の国民が信じるイスラーム教では，貧者への喜捨が義務付けられており，こうした子供たちの存在が，天国でより高いステータスを得るために必要な善行の機会を人々に与えるのだという解釈を知ったのは，帰国後，随分と時間がたってからのことであった。仮に，こうした解釈が事実であるならば，子供たちの行動は，「物乞い」というよりも「托鉢」と呼ぶ方がより適切であろう。なおマラブーとは，スーフィー教徒の修行の拠点リバートに住む修道士ムラービトがフランス語に転化したものであり，ここでは簡単に宗教指導者としておく。

所得の増大に伴って，金銭を払うことで必要な財やサービスを市場で調達できるようになった現代日本においては，他人に何かを働きかけたり，何かを依頼したりするという煩わしさを回避して生きることが容易になった。しかし，他方でそれが人間関係の希薄化や孤立化を生み出していることは周知のとおりである。物乞いという，己の尊厳を地に落とすような究極的な体験に，断られるのを覚悟で他人に何かを頼んだり，働きかけたりすること，つまり，人間が社会で逞しく生きていくための術を獲得するといった自己啓発的な要素が隠されているかもしれないことは否定しはしない。しかし，実態としては，こうした子供たちの大半が貧困家庭の出身で，十分な食事や教育を施すことができない両親によってマラブーに預けられていること，子供たちはマラブーの指示でこうした活動を展開しているにすぎず，自主的に托鉢をおこなっているわけではないこと，子供たちが獲得した金銭や財はマラブーにそのまま引き渡されること，マラブーの立場を擁護するならば，子供には教育や食事が必要であり，親がそうした費用を払えないのであれば子供自身に稼いでもらう必要があるということになるが，たとえ金銭を受け取っても，子供たちに適切な教育を施しているようには見えないマラブーも少なからずいること，設定した金額を集めることができなかった子供には鞭打ちなどの罰を与えるマラブーもいること，以上の理由から，子供たちのこうした活動に対しては，かねてより，マラブーによる強制児童労働，人権侵害という批判が根強くみられた。

このような状況下で，2005年5月10日，セネガル政府は人身売買を禁止する法律（Loi n° 2005－06 du 10 mai 2005, relative à la lute contre la traite des personnes et pratiques assimilées et à la protection des victims）を制定した。この法律の第1章，第2節には，他人に物乞いをさせた場合には，2年から5年の懲役もしくは50万CFAフラン（約10万円）以上200万CFAフラン（約40万円）以下の罰金が科されることが明記された[2)]。しかしながら，この法律施行後も，物乞いをする子供の数は多少は減ったかもしれないが，消滅することはなかった。そもそも，本法律は，マフィアやテロ組織のグローバルな活動を抑制する目的で，2000年12月にイタリアのパレルモで調印された「国際的な組織犯罪の防止に関する国際連合条約」を意識して，他国と足並みを揃える形でセネガル

政府が制定したものであり，セネガルの宗教団体でみられる一連の「托鉢」活動を強く意識するものではなかった。実際，1978年7月9日に制定された刑法第245条では，「物乞いは禁止されるが，宗教的な伝統によって実施される貧者への施しは物乞いとはしない」とされており，2つの法律の間で整合性がとれていないことは当初より指摘されていた[3)]。

こうしたセネガル政府の姿勢に対して，各国政府，国際機関，内外のNGO団体，国内の知識人層からの圧力は日ましに強まった。そして，法律制定から5年が経過した2010年，遂に，クルーアン学校の教師7人が，子供に物乞い活動をさせた罪で逮捕された。同年9月8日に下された判決の内容は，懲役6か月(執行猶予付)，罰金10万CFAフラン(約2万円)と軽く，量刑の判断基準も，2005年の法律ではなく，1978年に制定された刑法第245条に準拠するものであった。つまり，とりあえず内外の批判に応える姿勢をみせつつ，今後の活動の見直しを宗教団体に喚起するに留まったと言ってよかろう。もっとも，この裁判を通じて，旧宗主国フランスの影響を強く受けた公教育と異なり，クルーアン学校には政府から補助金が全く供与されていないこと，これにより，子供たちは物乞いをしてクルーアン学校の教師に貢がざるをえない状況におかれているという構造的な要因が明らかになった。国家からの補助を受けていない学校は，国家の管理も調査も受けない。セネガル国民の95%がイスラーム教徒であり，幼少時には，何らかの形で，多くの場合，私塾のクルーアン学校で学ぶにもかかわらず，クルーアン学校はセネガルの公のシステムにおいては，完全にマージナルな存在でしかないことが明らかにされたのである。

セネガルの公用語はフランス語であり，公の制度は旧宗主国フランスの制度の影響を強く受けている。筆者は，フランス語を媒介としてセネガル社会と付き合っているが，当初，文献や統計がフランス語で発表されている以上，フォーマルな経済社会や経済活動を見るかぎりにおいてはそれで十分事足りると考えていた。しかし，セネガル社会を知れば知るほど，実は，先にみたマージナルな要素が広く深く人々の心の中に浸透し，日常生活や経済活動に強く影響を与えていることに気付かされるようになった。人類学者などにとっては既に自明のことであろうが，社会が少なくとも2重構造となってお

り，フランス語や欧米社会の側から十分に理解できる世界と，スーフィズムの流れを汲む共同体の影響を強く受けた世界が共存しているのである。経済学においても，二重経済理論といった研究がないわけではないが[4]，ただし，そこでは，社会が，都市と農村，近代部門と伝統部門，フォーマル部門とインフォーマル部門，熟練労働と未熟練労働，近代的な教育を受けた人と受けていない人といった二重構造に区分され，両部門間での移動（しばしば，農村から都市，インフォーマル部門からフォーマル部門）は考慮されるが，例えば，近代的な教育を受け，英語，フランス語に堪能であるが，国家のフォーマルな制度には決して表に出てくることのない地方のクルーアン学校で教師をしているような人物－つまり両部門に同時に所属する人，もしくは両部門を頻繁に行き来するような人物－は想定されていない。実際，95％のセネガル国民がイスラーム教徒であり，その多くがムリッド教団，ティジャニー教団，カーディリー教団といったスーフィー教団に属していると言われている。いずれの教団においても，信徒の多くは，就学前の子供にクルーアン学校でクルーアン教育を受けさせる。そして，そうした経験を通じて，子供たちはそれぞれの共同体の構成員になっていく。それぞれの共同体には受け継がれてきた決まり事があり，それらは必ずしも欧米スタンダードな価値観と一致するわけではない。他方で，一定のクルーアン教育を受けた子供も，就学にあたっては，公立，私立いずれにしろ，旧宗主国もしくは西欧の影響を強く受けた教育機関で学ぶことを選択する。これにより人々は，欧米スタンダードな価値観と共同体の価値観の双方を身につける。そして，どちらか一方のみを選択することはせず，２つの価値観を器用に使い分けて生活しているように見える。例えば，公には，フランス的な男女平等の精神を尊重しつつ，しかしながら，共同体においては，男女を区別し，性別によって役割が異なることを容認し，男女の空間を分け，視方によっては，男を差し置いて女がでしゃばるのは好ましくないとの雰囲気を容認するかのような，一見するとアンビバレントな状態が観察されるのである。前者がウォロフ語やウォロフ社会を理解しない外国人にみせる「建前の社会」であるとすれば，後者は共同体に息づく「本来の社会」になるのだろう。先の物乞い（托鉢）を巡る２つの法律についても，前者が，国際連合条約の調印後，他国と足並みを揃えて人身売買を禁止する法律を

制定することで内外の援助機関や諸外国を満足させる表の顔であれば，後者は，実際にその適用には躊躇する本来の姿という解釈も不可能ではなかろう。

このように，筆者はセネガル社会の中に西欧向けの「建前の社会」と彼ら自身が持つ「本来の社会」の双方が共存しているように感じるのであるが，これまでのところ，「本来の社会」を強く前面にアピールする動きはみられないようである。むしろ，西欧社会や外国人は「本来の社会」を理解する寛容さを保持していないことを前提に，各国政府，国際機関，援助団体等には「建前の社会」を前面に押し出して近代的なセネガル社会を提示することで無用な軋轢を避け，「本来の社会」は，その共同体の維持に工夫をこらしているように見えるのである。しかし，先にもみたように，近年，欧米や国内の高等教育で高い教育をうけながらも，イスラーム共同体の価値観を重視する，もしくはそれを無視しない，つまり，近代社会と共同体の2つの世界を行き来する人が増えている。毎週金曜日にダカール市内のモスクで祈りをささげる人々の数がこの10年で急増している点からもそれは説明されよう。高い近代教育を受けながらも，従来の共同体の価値観も重視するセネガル人の増加は，近代部門を介在させることなく，共同体のグローバル化を促すことも容易にしているようである。別稿で改めて論じたいが，実際，国内に十分な職がないセネガルでは，こうした共同体が仲介する形で移民ネットワークが形成されている。サブサハラアフリカ諸国からの移民というと，未熟練労働者の不法移民がイメージされやすいが，現在では大学をはじめとする欧米の高等教育機関や国際機関で働くセネガル人や，大規模にグローバルビジネスを展開する企業家も増えている。そして，世界中に散らばったこれら同胞が，共同体を新天地で形成し，新たな同胞の移住を助けている。9.11のテロ後，イスラームに対する西欧社会の眼差しは厳しくはなったが，高い人口成長率と，資源価格の高騰に支えられながら，イスラームが着実にグローバル化していることも追い風となっているようである。

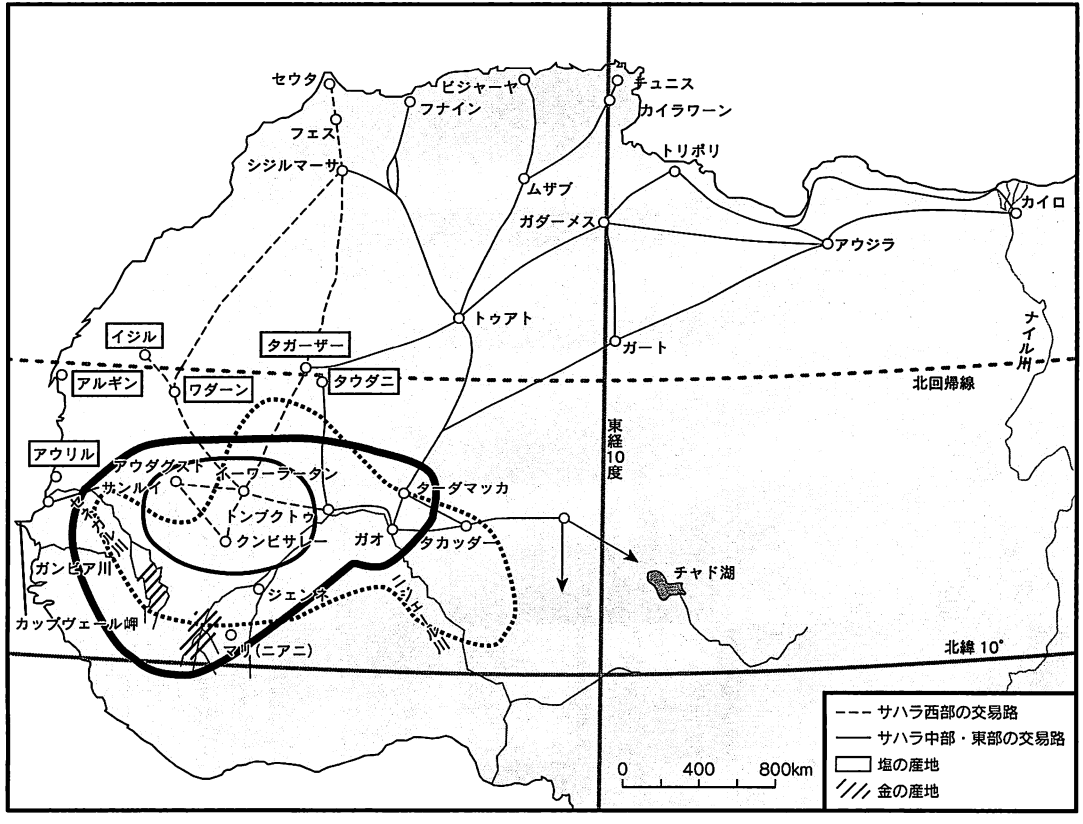
前置きが長くなったが，本論文の目的は，こうしたセネガルの社会経済とそのグローバル化を理解するための基礎資料として，現在，セネガルでもっとも信徒が多いとされるスーフィー教団の一つムリッド教団の概要をまとめることである。ムリッド教団については，人類学者を中心に，既に多くの研

究の蓄積がある[5]。また，近年，若手日本人研究者からも，アラビア語やウォロフ語を駆使した優れた研究が出現している。しかし，経済学や社会経済学の視点で論じられたものは少ない。以下，数回に分けて，セネガルの経済社会とそのグローバル化を理解することを目的に，これらの先行研究や筆者のフィールドワーク経験を踏まえて，ムリッド教団誕生の背景と概要を明らかにしたい。まず，本稿では，ムリッド教団誕生の背景の一部として，西スーダン地域のイスラーム化とウォロフ伝統社会の概要とその崩壊の様子についてまとめる。なお，ここでのスーダンとは，ハルツームを首都にもつスーダン共和国とは全く別物である。スーダンとは，元来，アラビア語で「黒」，つまりアラブ社会から見て黒人の国を意味する。本研究では，西スーダン地域を，北回帰線と北緯10度に挟まれた地域のうち，およそ東経10度よりも西側に広がる地域と定義する(図１参照)。ただし，このエリアのうち，本稿で舞台となるのは，ニジェール川大湾曲部にあるガオより西部が中心となる。これに対して，およそ東経10度より西に広がるアフリカ大陸西部一帯を西アフリカ，また，セネガル川とガンビア川に挟まれる地域をセネガンビア地域と定義したい。

II．西スーダン地域のイスラーム化とウォロフ社会

II．１　西スーダン地域のイスラーム化

現在，サハラ砂漠がある地域は，太古の時代には雨も頻繁に降り，水が豊富であったといわれている[6]。しかし，紀元前2000年頃から徐々にサハラ砂漠の乾燥化が進み，アフリカ大陸西部は，砂漠とそれを囲む巨大なサヘル地帯を挟む形で，北縁に地中海沿岸地帯，南縁に大サバンナベルト，その南部にはギニア湾に沿うように森林地帯が広がり，大きく分けて４つの気候帯が配置されることになった。米国の歴史家カーティンは，同じ自然環境の下で生活する人々の間には交易の動機が生まれないのに対して，異なった自然環境が隣り合う地域においては，専業・分業が創出されやすく，それに伴い交易が発生しやすいとし，とりわけ，世界のどこの地域と比べても，このサヘル地域がその点で際立っていることを指摘している(Curtin 1984)。彼は，サ



私市(2004)，69頁を参照に筆者作成

ガーナ帝国
マリ帝国
ソンガイ帝国

図1　西アフリカ地図(12世紀－16世紀)

ヘル地帯は農業が可能なサバンナ地帯と遊牧生活以外は不可能な乾燥ステップ・砂漠地帯の境界域になることから，そこでは，生活に必要なほとんど全てを自分達で生産することができる定住農耕民と，家畜とともに常に移動せざるをえないことから必要に応じて穀物，衣料，金属製品を定住民から入手しようとする遊牧民の間で，競争的かつ協力的な関係が構築され，交易が発達したと指摘する(カーティン 2008：48－49)。もっとも，サヘル・サバンナ地域内においても，各個人が自給自足的に生活していたわけではない。例えば，坂井(2003)は，この地域一体には，ソンガイ(ニジェール川大湾曲部)，ソニンケ，マリンケ，バンバラ(ニジェール川上・中流域)のマンデ語を話す諸民族，ハウサ(ニジェール川中下流域)，ウォロフ(セネガル地域)，牧畜民族のフルベ，砂漠の民であるトアレグ，モール，ベルベル人等が生活しており，こうした多民族，多業種，多職能の諸集団によって構築された複合的な社会編成の下で，交易のみならず，情報や人を含めた多元的な交換システムが形成されていたと指摘する[7)]。つまり，西スーダン地域は，はるか以前の時代より，上にみたような多層な交換システムを通じて，北アフリカや中東に繋がっていたのである。

7世紀にアラビア半島で誕生したイスラームは，当初，こうした交易ネットワークを通じて，西スーダン地域にゆっくりと浸透していった。しかし，注意しなければならないのは，イスラームの影響を受けた地域が，同質的にイスラーム化を実現したわけではないことである。これらの地域には，土着の伝統宗教や慣習が既に存在しており，それらが併存する形でイスラームが受け入れられるという，シンクレティズムやデュアリズム，多元的共存(pluralism)と呼ばれる現象が観察された[8)]。したがって，どの民族が，もしくはどの王国がムスリムであるか否かを単純に線引きすることは困難であった。

さらに本稿の舞台となるセネガンビア地域の北限となる現在のモーリタニアとセネガルの国境を流れるセネガル川中流域には，キリスト誕生の頃には既に複数の黒人王国が形成されていたとされる。当時，既に乾燥化がすすんでいたセネガンビア地域において，このセネガル川中流域は数少ない穀物生産・輸出地域でもあった(Robinson et al. 1972：556)。また，民族，文化的にも，北アフリカのベルベル人とサブサハラアフリカの黒人が接する地域であ

り，両者の間での経済取引も活発であった。これら一帯は，アラブの文献ではタクルール，フルベの人々の間ではフータ・トロと呼ばれた(Robinson et al. 1972：555)[9]。タクルール地域の人々は，フルベ(別名：フラニ，プル等)語を話すことから，フルベのサブ・グループとされる。しかし，フルベは，現在のエチオピアあたりを発祥とする，アフリカ大陸北半分一帯に拡散した遊牧民であるのに対して，タクルール地域の人々は定住農民であることから，東からやってきたフルベが定住化し，土着のウォロフやセレール，場合によっては北部のベルベルなどが混じった民族とされるが，はっきりしたことはわかっていない。現在，こうした人々を，総称して，トゥクルール(Toucouleur)と呼ぶこともあるが，これは，「タクルールに住む人」という意味のアラビア語，タカリール(Takarir)がヨーロッパ語化したものにすぎず，その民族的起源を明らかにするものではない。

このタクルール地域は，11世紀頃には，周辺の王国を属領にして，タクルール帝国と呼ばれるほどの一大覇権を築いた。その時の為政者であったワルジャビ(War-jabi　1040年死亡[10])は，西アフリカの黒人国家で最初にイスラームに改宗したリーダの一人であり，イスラーム法を導入して，この帝国を統治したという(Stride and Ifeka 1969：20)。タクルール地域は，北西の大西洋岸のアウリルからの塩と，セネガル川上流の金を交易することで栄えたが，金は，当時，西スーダン地域で一大覇権を築いていたガーナ帝国にとっても重要な輸出品であり，それが理由で絶えずガーナ帝国からの脅威にさらされていたようである。他方，これら金を北アフリカに運ぶルートを支配していたのは，ベルベルを起源とするサンハージャの諸部族，グダラーやラムトゥーナであり，彼らはムスリムであった。

このうち，グダラーの長イブン・イブラーヒムは，1039年頃，メッカ巡礼を行い，その帰途にたちよった古都カイラワーン(現チュニジア)で，スーフィズムの影響を受けた導師イブン・ヤシーン(Ibn Yacin)に出会い，彼を故郷に連れて帰る。スーフィズムについては続編で論じるが，この頃からセネガンビア地域はスーフィズムの影響をうけていたのである。しかし，彼の教義はサンハージャの人々には受け入れられず，結局，支持者とともにセネガル川沿岸部に避難することを余儀なくされた。ここで彼らはラバート(要塞)を築

いて厳しい修行を行うとともに，思想の面でも先鋭化し，後にジハードを展開する基盤を形成した。なお，ジハードの第一義的な意味は，イスラーム教徒が己の内面と闘うことである。しかし，本研究で出てくるジハードの大半は，異教徒に対して行われる武力行使・介入，つまり，外に対する戦い(聖戦)を指している。もっとも，聖戦を行うにあたっても，本来，イスラームは厳格な手順を踏むことを求めており，そうした意味でも，西アフリカ史でしばしば語られるジハードが，実体を伴ったものであるかについては検証の余地が残されている。しかしながら，本稿では，そうした検証を行うことなく，史実で語られる内容に合わせてジハードという言葉を用いることにする。

さて，ワルジャビの死後，タクルール帝国の為政者となっていた息子レビ(Lebi)は，このイブン・ヤシーンに積極的に協力するという戦略をとる。『西アフリカの人々と帝国』を上梓したストライドとイフェカは，その理由を，うまくいけば，協力してガーナ帝国を滅亡に追い込むことが期待でき，そうでなければ，サンハージャの衰退につながり，それはそれで北部への勢力拡大につながるという目論見があったと分析する(Stride and Ifeka 1969：20)。結局，イブン・ヤシーンは，宗教改革運動を掲げて周辺諸国にジハードを展開し，11世紀後半にガーナ帝国を征服するのみならず[11]，近隣一帯を急進的にイスラーム化し，そしてモロッコと西アルジェリア，そしてアンダルシア半島の南部一帯を支配するアルモビドゥ（ムラービト)朝を打ち立てた。これは，東方イスラーム世界とは全く異なる独自のベルベル・イスラーム文化圏でもあった。しかしながら，タクルール帝国の力も長くは続かなかった。13世紀にガーナ帝国が滅亡しても，スス(もしくはソソ)王国やマリ王国，そしてソンガイ王国が次々と興隆し，これらマリ帝国とソンガイ帝国，そしてそれら帝国の下部組織を構成していたジョロフ帝国の支配圏に飲み込まれることとなったからである。なお，洗練された通信や交通手段が存在しなかったこの時代，出現する帝国は，帝国といっても中央集権的な政治的集合体にはなりえない。むしろ複数の王国が乱立する中で，もっとも力のある王国にそうでない国が租税を支払うことで成り立つ一種の上下(主従)関係によって形成された一大覇権域と見る方が適切である。したがって，各王国もしくは領土には比較的強い自治が与えられており，また，上に立つ国も状況次第でフレキシブ

ルに入れ替わった。なお，ジョロフ帝国の支配から離れて，再び，この地に王朝が建設されるのは，コリ・テンゲラ・バ(Koly Tengela Ba)によって礎が築かれたデナンケ(DenankeもしくはDenianke Dynasty)王朝，別名グレート・フロ(Great Fulo)が出現する15世紀末から16世紀まで待たなければならない[12]。なお，デナンケ王朝は，フータ・トロ地域にのみならず，西部や南部のウォロフ社会へも覇権を広げ，イスラーム聖職者らによるジハードで滅ぼされる1776年まで約3百年前後の繁栄を遂げた。

さて，ガーナ帝国滅亡後，入れ替わるように台頭しつつあったスス王国を打ち破ったのは，複数の首長国に分かれていたマリンケを統合する形でマリ帝国を創設したスンジャタ・ケイタであった。彼自身はムスリムでなかったというが，マリ帝国(1240－15C末)は，交易とイスラームの保護を重視した。なぜなら，イスラーム教は，契約法，与信，情報といった交易に必要なツールを与えたからである。また，ガーナ帝国の時代には，ベルベル人が塩交易を，黒人が金交易を支配していたが，マリ帝国の時代には，黒人自らがタガーザへ行って塩を調達するようになり，これがマリ帝国の重要な経済基盤の一つとなった[13]。さらに，塩交易の支配権確保は，これまで北主導で行われていたサハラ縦断交易のあり方の見直しにも繋がり，マリ帝国の商人が，北アフリカ地域の商人と対等な交易パートナーになるのみならず，エジプトを中心とした東方イスラーム世界に直接的に繋がることも可能とした[14]。マリ帝国最盛期の王マンサ・ムッサの時代に，セネガンビア地域で生まれたジョロフ帝国はマリ帝国の支配下に入り，これにより，セネガンビア地域も，東方イスラーム世界と繋がる交易圏に組み入れられることになった。

この流れは，マリ帝国が衰退し，15世紀後半に，ニジェール川中流域のガオに拠点を置くソンガイ帝国にとって代わられた後も大きくは変わらなかった。ソンガイ帝国を誕生させたスンニ・アリー (1464－1492)は，一部の，とりわけトンブクトゥのイスラーム知識人を弾圧したことから，反イスラームの烙印を押されることもあるが，これについては，前述のように伝統宗教とイスラームの多元的共存状態が背景にあることも忘れてはならない。実際，スンニ・アリーは，伝統宗教の呪術者である一方で，イスラームの重要性を認識し，イスラーム教徒を名乗るという矛盾した立場にあった(Lapidus

2002, 404；Wiesner, M. E. 2005：104－105；Mikaberidze, A. 2011：859－860)。対して，スンニ・アリーの死後，彼の息子スンニ・バルに打ち勝ってソンガイ帝国の支配者となり，アスキヤ朝を打ち立てたアスキヤ・ムハンマドは，イスラーム教をソンガイ帝国の宗教とし，トンブクトゥのイスラーム学者とも良好な関係を保ち，メッカ巡礼の折りには高名な学者に教えを乞うなど，中東でも評判の良いイスラーム教徒として名を馳せた(苅谷　2012b：56－57)。しかし，帝国の支配者層がイスラーム化しても，大多数の臣民は伝統宗教を重視していたことから，為政者はイスラーム教徒であると同時に，伝統宗教を司る長としての役目を果たすという矛盾は解決されないままであった[15]。

ところで，アスキヤ朝の時代にも，主たる交易パートナーがエジプトであることには変わりなく，西スーダンとモロッコを繋ぐ交易ルートがかつてのような活況を取り戻すことはなかった。このような状況にあって，1444年，ポルトガルが，現在のカップヴェール岬に到達する。大西洋交易の幕開けである。また，地中海でも新たな動きが生まれる。15世紀初頭からオスマン・トルコが勢力拡大を続け，ついに1453年には東ローマ帝国の首都コンスタンチノープルを攻略してイスタンブールとし，東地中海へと覇権を拡げつつあった。一方，西地中海では，コロンブスがアメリカ大陸に到達した1492年にイベリア半島からイスラーム勢力が一掃され，その残党はモロッコに逃れた。このように地中海の東と西に広がる両勢力が北アフリカやスーダン地域に無視できない影響をおよぼすようになると同時に，大西洋交易がサハラ砂漠縦断交易の衰退を促すとの懸念が高まる中で，モロッコのサード朝はサハラに進軍して黒人の支配下にあった塩床タガーザを奪取し，1591年にはトンブクトゥ，ジェンネ，ガオを征服してソンガイ帝国の衰退を導いた。

しかし，サード朝も，結局，当該地域を安定して支配するには至らなかった。そして，西スーダン地域は，17世紀以降，中小規模の軍事化した集団が数多く出現し，ジハードの名の下での武力行使が散発する激動の時代に入るのである。アメリカ在住の政治経済学者のオハエグブラムは，その理由を，第一に，ソンガイ帝国崩壊後，旧支配者層，北アフリカ勢の双方ともにその受け皿となる勢力を形成するにいたらなかったこと[16]，二つめに，大西洋交易が台頭する中，サハラ縦断交易がかつてのような繁栄を取り戻すことなく，

そのことが地域の不安定化を招いたこと，三つめとして，ソンガイ帝国末期 —— 特に1582－1591年 —— に発生した内部の混乱によってイスラームの精神が形骸化したこと，そして最後に，大西洋交易の発展が大西洋奴隷貿易を推進し，そのことが西スーダン地域の権力分散化と不安定化を推進したと指摘する(Ohaegbulam 1990：79－80)。

ところで，ソンガイ王国が滅ぼされる100年ほど前の14世紀から15世紀にかけて，アラビア半島 —— 現在のイエメン —— 出身のベドウィンが北アフリカを経て現在のモーリタニアに侵入し，土着のベルベル人を支配することを始めた。彼らは自らをベン・ハッサン人(Awlad-Banu Hassan)と呼んだ。兵士である彼らに，当初，ベルベル人はキャラバン隊の護衛の代償として貢納を払ったりしていたが，そのうち，アラブ人によるベルベル人支配が顕著となり，16世紀には，言語の面でも，アラビア語系のハッサニーヤが広く話されるようになっていた(Isichei 1997：300)[17]。結果的に，地域はアラブ系兵士階級のハサニ(Hassani)グループと，ベルベル人系聖職者で，主に交易を生業とするザワヤ(Zawaya)グループに二分された。そして17世紀には，モロッコに協力して，ハッサニグループが，黒人を兵士獲得目的で拉致する動きがみられるようになっていた。こうした状況において，1670年代に，南部モーリタニア出身の聖職者ナスール・アル・ディン(Nasr Al Din)がハッサニグループに対してジハードという名の武力行使(Shurr Bubba)をしかけたのである。後述するが，彼は，大西洋奴隷貿易が本格化しつつあったウォロフ社会に対しても，イスラームへの改宗を求める運動(Toubenan)を行っている。結局，1674年の戦いで，ナスール・アル・ディンは殺害され，モーリタニアではアラブ民族のベルベル支配が強まった。しかしこれは同時に，両種族間での婚姻をすすめ，アラブ化したベルベル人，もしくはベルベル化したアラブ人 —— つまり，モール人 —— の誕生に繋がった。モール人は現在のモーリタニア共和国を形成する民族である。のちに，ブラクナ(Brakna)，トラルザ(Trarza)，ダルマンクール(Darmankour)といった部族集団に分かれ(図２参照)，セネガル川右岸の中上流域から河口に向かって順に首長国(émirat)を形成し，セネガンビア地域に進出したフランス商人との間でアラビアゴム交易を行う一方で，セネガル川交易の利権をめぐって，フランスやウォロフと何度も武力衝

突を繰り返した[18]。他方，ザワヤグループは，ユネスコが刊行した『アフリカの歴史』によると，ナスール・アル・ディンのジハード後の18世紀以降，セネガンビア地域のマラブーとの間で緊密な関係を形成したという(Ogot 1999：208)。その背景の一つに，奴隷貿易が本格化しつつあったこの時代，沿岸部にいたマラブー達が内陸部に移動したことがある(Ogot 1999：208)

さて，1700年頃に，ナスールの思想に影響されて，セネガル川上流のガラムの南部地域でもジハードが発生している。このジハード成功を受けて，リーダーのマリック・シィ (Malik Sy)はブンドゥ (Bundu)というイスラーム国家を樹立した。この地域はもともとトゥクルールやフルベが多く住む地域であったが(Siré Abbâs, S. 1913：211)，マリック・シィもフータ・トロ地域のポドール(Podor)出身であり，トローベ(Torodbe，単数の場合はTorodoo)という階級に属していた[19]。トローベの定義については，施しを受けるという意味の動詞*tooraade*が語源という説(Robinson 1973：289)が実態に近く，実際，大半が外部者からみれば物乞いにみえる行動 —— つまり，托鉢との解釈もできる —— で生計を立てていたようである(Lapidus 2002：418)。もともとは解放奴隷や他地域からの移民としてフータ・トロ地域に住みついたイスラーム知識人が多く，イスラーム化していない伝統社会においてはアウトローな存在であった。ゴメの研究によると，トローベの特徴は4点あるという。まず，イスラームについての知識が豊富で，フルベ語を話すが，アラビア語で文字を書き，どの職業カーストにも属しておらず，遊牧民的な生活を棄てた人々という(Gomez 1985：541)。こうしたトローベを含むイスラーム教徒たちは，5歳から10歳ぐらいの子息をコーラン学校で学ばせる。そして，さらに上の学校で学ばせたい場合には，当時，地域一帯で評判の高かったセネガンビア地域のカジョール王国の南部の町，ピール(Pir)にある学校に送ったが，この学校が前述のモーリタニアのイスラーム教徒と強い関係をもった学校であった(Gomez 1985：541)。ここで，セネガンビア地域一帯から集まったイスラーム教徒たちはモーリタニアのジハードの影響を受けることになり，それぞれの出身地でジハードを喚起するリーダーは多くの場合，伝統社会ではアウトローな存在であるトローベとなるのであった(Robinson 2000：135)。

このブンドゥでのジハード成功は，すぐにモール社会と黒人社会に挟まれ

た先述のタクルール(フータ・トロ)のデナンケ王朝にも波及した。モール社会に近いタクルール地域でも，以前より，北アフリカの勢力が民衆を拉致する動きが見られたが，支配層が積極的に策を講じるようには見られなかった上に，民衆は重い税負担を強いられていた(Lapidus 2002：419)。また，貴族たちが奴隷貿易を通じてヨーロッパ商人から入手したアルコールを飲用することも見過ごせなかった(Lapidus 2002：418)。こうした退廃的な為政者に，1776年，スレイマン・バル(Sulayman Bal)というトロードがジハードをしかけ，独立したフータ・トロ・イスラーム国(Almamate of Futa Toro)の樹立を宣言した。バルは，教権国家をめざし，為政者は，同時に尊敬されるイスラーム指導者(アルマニ　Almani)であるべきであり，人々によって選ばれるべきとした(Coulon 1981：18)[20]。しかし，彼はすぐに殺害され，その意思を，同じトロードであるアブドゥル・カディール(Abdul Kader)が引き継ぐ。彼は，カイロで学んだ経験を持つ，人々から尊敬を集めるイスラーム指導者であり，地域の他のイスラーム指導者と綿密なネットワークを持っていた。そしてこのことが，18世紀にセネガンビア地域一帯で発生したジハードを喚起することにもつながった(Lapidus 2002 ：419)。彼がフータ・トロ・イスラーム国の為政者になって以降，土地はトローベに分け与えられ，その代りにウォロフ諸王国に対してジハードをしかけるための戦士を供給することが呼びかけられた(Lipschutz, M. R. and R. K. Rasmussen 1986：1)。また，ウォロフの侵攻に先立ち，1786年，カディールは，フータ・トロに幾たびも侵攻して税の支払いを要求していた北部のモール人首長国トラルザとブラクナを攻撃し，トラルザの首長殺害に成功した。そして，1790年頃には，ウォロフ諸王国への軍事進攻を実施した。しかし，すぐにカジョールのダメルであったンゴーン・ンデラ(Ngonne Ndeela)に蹴散らされ，アブドゥル・カディールは捕えられて，フータ・トロに送還されている(Ogot, B. A. et al. 1999：219)。とはいうものの，この派兵はアニミズムの強かったウォロフ王国でのイスラーム化を促し，トローベ自身も，現地の支配者層の娘と婚姻関係を結び，土地の譲渡を受け，徐々にウォロフ社会の支配層に食い込んでいくのであった(Lapidus 2002 ：420)。次節では，そのウォロフ伝統社会の社会階級構造と，それが外部の影響を受けてどのように変化するのかについて論じたい。

II．2　ウォロフ伝統社会の社会階級構造とイスラームの浸透

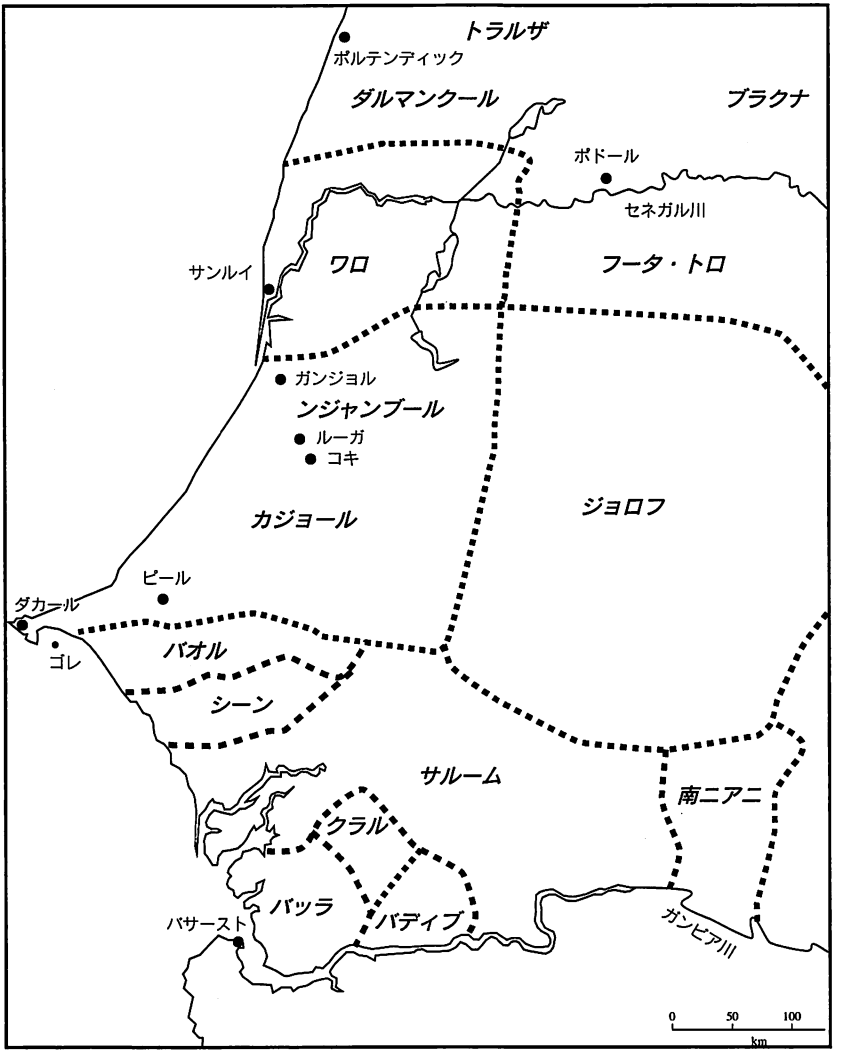
ウォロフと呼ばれる人々が現在のセネガンビア地域で社会を形成するようになったのは比較的新しく12世紀ぐらいと言われている(Le Roy 1982：53；Diop，A．B．1981：120)。それ以前は，マリ帝国を形成したマリンケ，続いてセレールがこの地で生活していたが，11世紀頃にウォロフの人々が現在のセネガンビア地域の北部に居住するようになったことで，セレールは南のガンビア川北部へ押しやられたといわれている(Diop，A．B．1981：19)。もっとも，20世紀半ばに，ウォロフの人々の姓からその出自を分析したシェイク・アンタ・ジョップの研究に基づけば，現在のウォロフと呼ばれる人々は，スーダン地域のみならず，シエラレオネ，コートジボワール，エジプトなど，アフリカ大陸北部の各地から移り住んできたリネージ(家系)の総体と考えられる(Diop，C. A. 1987：208－222)。つまり，当初は生物学的に何がしかの特徴を共有する民族であったのかもしれないが，そこにアフリカ大陸各地から移り住んできた人々も加わり，共通の言語ウォロフ語を話す人々をウォロフと呼ぶと理解した方が実態に近いと思われる[21]。このように，セネガンビア地域に移住したウォロフは，それぞれのリネージを中心に村を作り，新たなリネージを受け入れながら社会を形成していった。土地は個人所有ではなく，共同体で所有され，ラマン(Lamen)と呼ばれる長老によって使用権が各家族に与えられた。しかし，当初，ラマンにはそれほど大きな政治的権力はなく，収穫物のほんの一部が謝礼として支払われるにすぎなかったという(Diop，A．B．1981：120)。

13世紀頃，伝説的な英雄として知られるンジャジャン・ンジャイ(Njaajaan Njaay)が，後に，ウォロフばかりか，モール，トゥクロール，マリンケ，フルベ，セレールなどが居住する地域一帯をカバーするジョロフ帝国の礎を形成した。ウォロフ語で語り継がれる伝説によると，ンジャジャン・ンジャイは，アルモラビドゥ戦士の子孫とされるが，ポルトガル人がセネガル沖にたどり着いた15世紀以前のジョロフ王国についての記録は残っておらず，詳しいことはわかっていない。しかし，ジョロフ帝国が形成される前の段階で，先のラマンを中心とする共同体がすでに確立されており，帝国の出現とともに，ラマンに政治的な役割が与えられ，これらラマンを統括する大ラマンのような者が，カ

ジョール，ワロといった比較的大きな地域を統治し，中でも力のある領主に，そうでない領主が租税を支払うことで帝国が形成されたと考えられている(Diouf 1990：32)。したがって，先にもみたように，帝国といっても傘下の複数の領土には，かなりの自治権が与えられていた。しかし，16世紀半ばに，カジョール領主の，ジョロフの王に対する租税支払拒否をきっかけに，ジョロフ帝国は，図２にみるように，ジョロフ，カジョール，ワロ，バオル(以上，ウォロフが多数を占める王国)，そしてサルーム，シーン(セレールが多数を占める王国)といった複数の王国に分裂してしまう。

ここで，ウォロフ伝統社会における人々の社会関係についてみてみよう。ウォロフの伝統社会は，身分が明確な階級社会であり，カーストが存在する社会である。実際，現在でも，インターネットの掲示板上で，婚約者がカーストの出自であるため親から結婚を反対されているといった身の上相談が展開されていたりする。表には見えにくいが，古くから受け継がれてきた社会階級や序列意識が，少なくとも一部には根強く残っていることが窺える。現在のムリッド教団とその社会経済的意味を理解するには，こうしたウォロフ社会で伝統的にみられる階層構造を理解することは重要である。しかし，その概要については，実態が複雑であることもあって，研究者の間で必ずしもコンセンサスはとれていない[22]。そのうちの一つが，カーストやウォロフ伝統社会の階級構造をめぐる一連の解釈である。カーストの定義については，ポルトガル社会で見られた階級の世襲を意味するcastaが派生したものとされ，一般的に①階級の世襲，②同一階級(身分)内での婚姻の強制，③生まれながらにして職業が決められていることの３点が特徴として挙げられる。インドのカースト制や日本の士農工商とその下におかれた身分を総括した階級制度などがイメージされやすく，どちらにおいても，高貴とされる身分と卑しいとされる身分双方が含まれた階層序列の制度そのものを指しており，この場合，出身階級の地位の高さと政治権力の大きさは連動しているのが一般的である。しかし，ウォロフ伝統社会では，まず第一に，カーストは，社会階層の一部でしかない特定職業集団のみを指すとの理解が一般的である。また，社会階層の上下と政治権力の大小が一致していないという複雑さが見られる。

ウォロフ伝統社会でカーストと認識されている職業集団は，具体的には，



Davidson and Buah (1977) を参照に筆者作成。

図２　セネガンビア地域の王国（16世紀半ば－19世紀末）

ニェーニョ (ñeeño) と呼ばれる身分カテゴリーであり，これはさらに，地位の高い順から，ジェフ・レック (jëf-lekk 職人グループ)，サブ・レック (sab-lekk グリオなど音楽家グループ)，ニョーレ (ñoole 道化師や宮廷の雑用係) の３つ

のサブグループに分けられる。ジェフ・レックの仕事もさらに複数のサブグループに分けられ，もっとも地位が高いのがテグ(tëg 鍛冶屋)であり，それ以外にウンデゥ(unde 靴屋)，セーニュ(seen 木材加工)[23]，ラブ(rabb 織工)などが存在する(Diop A. B. 1981：50)。ジェフ・レックの仕事の成果は比較的わかりやすいのに対して，サブ・レックやニョーレのそれは形としては曖昧であり，芸を披露して，もしくは雑用をこなして，それを称賛もしくは評価した者から対価を頂戴するという形になるため，支払者から軽視，もしくは蔑視の対象となりやすいことが相対的に地位を低くしているとの解釈もある(Diop A. B. 1981：61)。

ニェーニョのみがカーストで，それ以外はカーストでないとするならば，ニェーニョでない人々を示す言葉としてゲール(géér)がある。シェイク・アンタ・ジョップによると，セネガル社会階級は，必ずゲールかニェーニョに分けられ，肉体労働(ただし，神聖な仕事とされる農業を除く)以外の職業につく人々は，すべてゲール(géér)であり，こちらの方が高貴とされた(Diop C. A. 1987：12)。ゲールは血が清純であるが，ニェーニョは穢れているとの認識である。このような考えが生まれた背景には，ニェーニョのような職業には異邦人が従事したからだとの説明もみられるが(Diouf 1990：50－53)，これについてもはっきりしたことは分かっていない。実際，グリオなどは，冠婚葬祭に不可欠であるにもかかわらず，彼らが村で一夜を過ごすと不吉なことが起きると村民が信じて嫌がるなど，明確な差別意識が人々の間で共有されていたようである。

対して，先述のアブドゥライ・バラ・ジョップは，ニェーニョがカーストであることを主張しつつも，他方で，ゲールのうち，農民もカーストの一つと捉え，ウォロフ社会には4つのカーストがあると理解してよいのでないかと主張している(Diop A. B. 1981：35)。他方，ゲールもいくつかのサブグループに分けられ，その間にも序列があるが，こちらについては異なるサブグループ間の結婚が珍しくなかったことから，ゲールをカーストとみなすことに慎重な研究者もいる(Diouf 1981：35－36)。

さらに複雑なことに，伝統的なウォロフ社会には，上記のゲールとニェーニョ(ñeeño)とは別に，自由人を意味するゴル(gor)と奴隷を意味するジャー

ム(jaam)という身分カテゴリーも存在する。貴族や高級官僚がゲールかつゴルであることについては一定のコンセンサスが得られているが，職業集団ニェーニョは自由人ゴルなのか否か，奴隷はゲールであるのか否か，仮にゲールであるとすれば，奴隷はニェーニョよりも身分が高いことになりはしないかといったことは明確にされていない[24]。これを受けて，先のアブドゥライ・バラ・ジョップ自身は，これらの比較研究から一般化した理論を提示することは困難だと告白する(Diop, A. B. 1981：113)。これに対して，セネガル社会研究の重鎮でもあるクーロンやバリーは，カーストという特定の職能集団を，君主から奴隷までの社会全体を包括したヒエラルキーに取り込んで，インドのカースト制度のように，一元的な視点で階級ピラミッドを描いて説明することを試みている(Coulon 1981，Barry 1998)。それらによると，表１にみるように，職業集団ニェーニョは，ゲールより下で，奴隷ジャームの上だとしている。ウォロフ社会研究の先駆けであるモンテイユにおいても，同様の階層構造が示されている(Monteil 1963：83)。しかし，後述するように，ウォロフ伝統社会には，身分の高い官僚よりも強い政治権力をもった奴隷も存在するなど，表１でみるような階級構造をもって，ウォロフ伝統社会の政治権力構造を理解するには無理がある。

この点について，表１をみながら，自由人ゴルと奴隷ジャームについてよ

表１　ウォロフ伝統社会の階級構造

身分カテゴリー	gor(自由人)/jaam(奴隷)	序列	説明		
高い ⇧	géér	gor	君主	garmiに所属	
	géér	gor	garmi	貴族	
	géér	gor	jambour	高官，官僚	
	géér	gor	baadoolo	平民，農民	
身分	ñeeño	?	jëf-lekk	職人	鍛冶屋(tëg)，織工(rabb)，木こり(lawbe)等
			sab-lekk	音楽	グリオ(géwél)、楽器演奏者等
			ñoole	サービス提供	道化師、宮廷の給仕等
⇩ 低い	?	jaam	jaam	jaami-buur	王家の奴隷
				jaami-baadoolo	jaam-sayoor　囚われた奴隷
					jaam-juddu　家内奴隷

Coulon(1981)，Barry(1998)，Diof(1981)，Diop，A. B.（1981)より筆者作成。

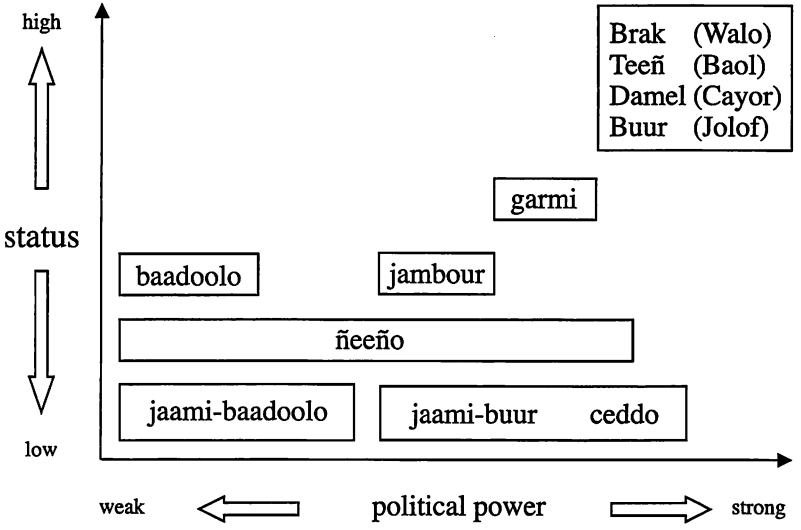
り詳細にみてみよう。まず，ゴルも，身分の高い順から，貴族階級ガルミ(garmi)，官僚や高官に相当する職務を担うジャンブール(jambour)，そして政治的な力は全く持たないバードーロ(baadoolo)の3つのサブグループに分けられた。このうちガルミ階級から君主(王)が選ばれる。君主の称号は王国によって異なり，ワロ，バオル，カジョール，ジョロフの順に，ブラク(Brak)，ティェン(Teeñ)，ダメル(Damel)，ブール(Buur)と呼ばれた。ウォロフ伝統社会では，とりわけ貴族階級ガルミにおいては，個人は母系集団に所属しつつ，政治権力は父系集団から息子へ継承されるため，王になるには母系，父系の両方で王家に繋がる氏族集団に所属する必要があった[25]。つまり，一夫多妻制が一般的なウォロフ社会では，複数の母系集団に，次の王位継承権を持つ者が存在することになり，王位継承をめぐって争いが発生しやすい構造にあった。具体的には，たとえばカジョールでは，父系は基本的にファール(Faal)家のみ，母系は最終的には7系存在したため，複数の母系集団の間で王座を巡って熾烈な争いが展開されたという[26]。同様に，ワロでも3つの母系集団が権力を求めて争っており(Ogot, B. A. et al. 1999：210)，内部での権力闘争は，モール人やフータ・トロといった外部からの軍事介入を容易にした。また，バオルの君主については，カジョールの王が併任するケースがしばしば観察された。

続いて，ジャンブールは，かつて共同体の土地の使用権の配分を担うラマンの子孫などが属する階級で，カンガン(kangam)と呼ばれることもある。先にみたように，異なる母系集団に所属する複数の候補者から王が選ばれるため，これらジャンブール等で構成された委員会が次の君主を選出する機能を担った。また，イスラーム化の進展とともに，高い位を持つイスラーム聖職者なども，このグループに属した。このうち，ガルミとジャンブールは武力を持つ兵士でもあった。対してバードーロは，自由人であったが，政治権力も武力も持たない平民であり，大半のものがこの階級に属した。多くは農民であり，略奪の対象でもあり，拉致され，北方のイスラーム圏や大西洋奴隷貿易の奴隷として輸出されもした。

最後の奴隷階級は，王家の奴隷と呼ばれるジャーミブール(jaami-buur)と，平民の奴隷ジャーミバードーロ(jaami-badoolo)の2つに分けられる。まず，

平民の奴隷についてであるが，ウォロフ社会では，捕虜のような形で奴隷になった者と，その奴隷の子孫に対する扱いは全く異なる。前者は，ジャームサジョール(jaam-sayoor)と呼ばれ，主人から全幅の信頼を勝ち得ることは決してなく，家畜同然の扱いを受けることも少なくなかった。とはいっても，家畜も大切な資産であることには違いなく，アメリカ大陸へ輸出された奴隷などに比べれば格段に良い待遇であったという。これに対して，雇い主の家で生まれたその奴隷の子供は家内奴隷ジャームジュドゥ (jaam-juddu)と呼ばれ，家族同然の扱いを受けることが一般的であった。女奴隷の子供が主人の子供であることも珍しくはなかったが，そうでなかったとしても，家事や家業の切り盛りを行う上でなくてはならない存在として大切に扱われたという[27]。これら平民の奴隷と異なり，王家や貴族に仕えるジャーミブールには，17世紀末にカジョールの王となったラット・スカベ・ファル(Lat・Soukkabé・Fall)によって武器を保有することが認められた。したがって，奴隷といっても，王家や貴族に仕えることから権力に近く，主人の地位が上昇すれば，より大きな権力を得ることが可能であり，貴族間で権力闘争が激しくなればなるほど，貴族も彼らに依存したことから，彼らの力も強大になっていった。つまり，ジャーミブールは奴隷身分でありながら，自由人(gor)かつゲール(géér)であるバードーロよりも，そして場合によっては，ジャンブールすらも凌ぐ大きな力をもったのである。同様に，不可侵な職業に従事していることを理由に人々からタブー視されるニェーニョであっても，王族・貴族の傍で財やサービスを提供する者の中には，身分不相応の権力を持つものもいた。

以上より，伝統的なウォロフ社会を理解するには，表１のような，一元的な身分の序列のみならず，政治権力との近さからも理解する必要がある。ウォロフ社会研究の第一人者であるジュフは，15世紀から18世紀にかけて，従来の身分の序列と連動しない大きな変化が見られ，とりわけラット・スカベ・ファルの時代にそれが制度化されたと指摘する(Diouf　1990：93)。そこで，図３では，やや煩雑になるが，身分の序列と政治権力への近さという２つの尺度で，表１にあげた各社会階層を図示してみた。このうち，君主，貴族(garmi)，そして奴隷(jaami-buur)は武器を保有することが許された階級であり，これにより，平民を意のままに従わせる絶対的な力を保持することになっ



筆者作成

図３　Wolof's Social Stratification and Political Power

た。またニェーニョにおいても，高い権力を持つ者の近くにいることで，身分不相応な権力を持つ者が生まれた。

以上にみるように，ウォロフ社会は，明らかに身分の序列や生まれながらの貴賤上下が存在する社会であった。ただし，これらの身分と政治権力の大きさは連動していない。また，フランスの人類学者クーロンが説明するように，不平等ではあっても，上位のものが下位のものを一方的に搾取することはなく，下位の者(クライアント)が，上位の者(パトロン)に貢納を納めるかわりに，保護を受けるというパトロン・クライアント関係が形成されていたこと[28]，中央集権的な力は弱く，各地域ではラマン主導の共同体が維持され，中央とローカルな共同体の関係は，絶対的に前者が強いというよりもむしろ緩やかなものであり，君主についても複数の候補者の中から人々の合意によって選出されるといった要素が君主の横暴な振る舞いを阻止しえたことから，不平等でありつつも，この関係は長らく維持されたと考えられる(Coulon 1981：56－57)。

しかし，ヨーロッパ人との交易が進むにつれて，徐々にこうしたバランスが崩れていく。沿岸部にあるウォロフ社会の支配者層はヨーロッパ商人との交易から，武器や酒類，布といったヨーロッパ製品を入手した。その対価として，彼らは入手した武器を用いて獲得した奴隷をヨーロッパに引き渡す必要があった。君主の指示の下で奴隷を捕え，ヨーロッパ商人に引き渡す役割を果たした者に，チェッド(ceddo，thiédo)と呼ばれる社会集団がいた。このチェッドも研究者によって捉え方が異なるが，先述のクーロンは，王侯奴隷ジャーミブールから兵士の任務についている者と説明する(Coulon 1981：56)。しかし，クーロンと同じく，西アフリカのムリッド研究の一人者であるオブライアンは，社会のあらゆる階層から採用された兵士(ただし，それぞれの階級ごとで小集団を形成)としている(O' Brien 1971：17)。そもそも，チェッドとは，ウォロフ語で不信心者，特にセネガンビア地域ではイスラームを信仰しない者(仏訳ではpaïen，英訳でpaganがしばしば用いられる)を意味する。セネガル社会研究の第一人者の一人であるモンテイユは，より明確に「呪術崇拝者(fétichiste)」と表現している(Monteil 1963：88)。そしてチェッドの対義語として，敬虔なイスラーム教徒を意味するセリーヌ(cerin，serin)が用いられる。言葉通りにとれば，君主(teeñ，damel等)，貴族(garmi)，奴隷(jaami)いずれにおいても，イスラーム教徒でなければ，もしくは，伝統宗教信仰者であればチェッドとなる。この点を認めた上で，グローバーは，カジョールの農民の目からすれば，酒を飲み，暴力を働く王侯奴隷そのものがチェッドであったと解説する(Glover 2007：40)。実際，多くの文献で，君主の下で奔放にふるまう奴隷をチェッドとしているところをみると，ことば本来の意味を離れて，チェッドと呼ばれる社会集団が存在し，人々から恐れられたのは事実のようである。ヨーロッパ人を含む外部者が描くチェッド像は，ムスリムであるか否かにかかわらず，酒を飲み，暴力を働き，奴隷狩りを行い，親族までをもヨーロッパ人に奴隷として売り渡し，民衆を脅してみかじめ料のようなものを徴収し，村の焼き払いに加担するといった無法者そのものであった。君主の下で王国の治安維持を担う警察や軍人としての役割を果たす一方で，それに相対立するマフィアのような要素を合わせ持っていたかのようである。支配者たちは，こうしたチェッドの武(暴)力を利用しながら，権

力の維持をはかる一方で，民衆を犠牲にして退廃した生活を送る者が少なくなかった。そして，こうした王・貴族そしてチェッドの支配が強まる中，民衆はイスラーム・スーフィー教団の聖者マラブーに救いを求めるのであった。

ここで，簡単に，カジョールやバオルを中心とするウォロフ社会のイスラーム化について整理しよう。既にみたように，早くから北アフリカのベルベル人やアラブ人と接触のあったセネガル川下流地域（後のワロ王国）は，11世紀頃よりイスラームが社会に浸透していた。また，マリ帝国の時代に，マリンケが流入した地域でも13世紀にイスラーム化が進んだ。これに対して，沿岸部に近いカジョールやバオルでイスラームが住民に広く受けられるようになったのは，これらの地域がジョロフ帝国から独立した16世紀半ば以降と比較的遅い（Diop，A．B．　1981：217）。その立役者は，カジョール王国の独立を導いたアマリ・ンゴネ・ソベル（Amari Ngoone Sobel）であり，彼自身もモール人から多くの影響を受けたマラブーであった（Diop，A．B．　1981：217）。といっても，先にみたように，カジョールやバオルがそれまでまったくイスラームの影響をうけていなかったわけではない。モールやトゥクロールのイスラーム指導者がイスラーム法学者や教師としてウォロフの支配者や共同体に尽くしていた。こうしたイスラーム指導者が多く流入した地域，たとえば，ピール（Pir），コキ（Koki, Coki）といった町や，ルーガの北部一帯を示すンジャンブール（Njambur，Diambour）地方などでは，コーラン学校も創設され，多くの学生を惹きつけた（Diouf 2001：108）。とりわけンジャンブール地方は，多くのイスラーム指導者が移住し，18－19世紀にセネガンビア地域のイスラーム化に重要な役割を果たした地域になる。こうしたマラブーが作る，現地でグリグリと呼ばれる護身用のお守りを求める人の数は，イスラーム教徒であるか否かにかかわらず，少なくなかったようである（Diof 1990：85）。ただし，これらイスラーム指導者達が政治に大きな影響を及ぼすようなことはなかった（Glover 2007：42）。そして，為政者たちも，自分たちの利益になる範囲でイスラームを利用したが，イスラームの教えが自らの行動を規制することは望んではいなかった。ジュフは，この時代においては，ウォロフの貴族とイスラーム教徒が，それぞれの思惑で協力関係を形成しえていたと明言する（Diof 1990：85）。

しかしながら，大西洋奴隷貿易の進展とともにこの協力関係は変容する。ヨーロッパ人との交易で相応の利益を得ていたウォロフの為政者や貴族は，その対価として奴隷を輸出する必要に迫られた。奴隷狩りの恐怖にさらされた住民 —— 多くはバードーロ階級に属する農民 —— は，安全を求めてガンジョール(Ganjool)など，ムスリムが多く生活するンジャンブール地方に避難することを余儀なくされた(Diof 1990：86)。これにより，従来のラマンを中心とする共同体とは別に，マラブーを中心とする共同体の形成と発展が促されることとなった(Diof 1990：88)。さらに，先にみたように1670年代に，ヨーロッパから入手した酒を飲み，地域住民を奴隷としてヨーロッパ人に引き渡す為政者に対して，セネガンビア初のジハードが，ナスール・アル・ディン(Nasr Al Din)によって起こされている。彼はウォロフ諸王国の王たちに，イスラームの教えに従うこと，生活スタイルを変えること，臣民達を略奪したり，奴隷化すべきでないと訴える(Babou 2011：46)。これら一連の運動はイスラームに改宗するという意味のtuubが派生してトゥベナン(Toubenan)運動と呼ばれ，フータ・トロのトローベが多くこの運動に参加した。ナスール・アル・ディンは先にみたようにすぐに暗殺されてしまうが，ジュフは，一連のジハードが，イスラーム共同体が人々を暴力から保護してくれることを農民たちに提示したと分析する(Diof 1990：90)。

次に，カジョール地域でマラブー達が君主に反旗を翻すのは，17世紀末から18世紀にかけてである。1690年頃から18世紀初頭にかけてカジョールとバオルの両国で君臨したダメル兼ティェン(Damel-Teeñ)のラット・スカベ・ファル(Lat Soukkabé Ngoné Latyr Dieye Fall)の暴政に対する反乱であった。ラット・スカベ・ファルは，1690年頃に，バオルの王，ティェンになった後，ヨーロッパ諸国から得た武器を効率的に用いて，カジョールに侵攻し，カジョールの君主，ダメルの称号を勝ち取ってダメル・ティェンとなり，1695年に，２つの王国を結合したグェージュ王朝(Geej Dynasty)を打ち立てた。グェージュとは，ラット・スカベの母系集団の名前である。それまで複数の母系集団で争うことで，調整がはかられていた貴族内部のバランスも，ラット・スカベ・ファルの母系集団グェージュが権勢をふるうようになったことで大きく崩れた。

17世紀末から18世紀初旬にかけての期間は，大西洋奴隷貿易の最盛期でもあった。彼は，ヨーロッパ製品の入手のために不可欠な奴隷の獲得に力を入れた。まずターゲットとなったのは，領土内にいる異民族や周辺地域の人民であった。当時，ルーガ(Louga)を中心としたカジョール北部のンジャンブール地方には，既にマリンケ系のマラブーが多く住んでおり，イスラーム化が進んでいた。身の危険を感じたこれらンジャンブール地方のマラブー達は，自らはもちろんのこと信徒や仲間を守るために，ワロ王国のマラブー，そしてモールの一部族トラルザの首長にも訴えて，1795年，ラット・スカベ・ファルに対する反乱を起こした。しかし，結果はマラブー側が惨敗し，これらマラブーの多くは，奴隷としてフランス商人に引き渡された。ラット・スカベによって武器を持つことを許された王家の奴隷が政府軍のような役割を果たしたことも大きい。しかし，ラット・スカベは，全てのマラブーを敵に回したわけではなかった。たとえば，カジョールでもっとも知られたマラブーの妻はグェージュ家の出身であった(Diouf 1990：94)。また，彼は，セリーヌ・ラム(Serigne Lamb)という職位を新たに創設して，一部のマラブーを権力に取り込むことにも成功した。セリーヌ・ラムのセリーヌはムスリムを，ラムは，遠方に重要なメッセージを伝えるときに不可欠な太鼓(ドラム)のことであり，権力の象徴となる単語である。彼らは，権力の中枢で，行政や司法，徴税などを行うイスラーム指導者となった。これに対して，権力とは疎遠で，コーラン学校の教師やイスラーム学者としての職務に徹するマラブーは，先のセリーヌ・ラムに対して，セリーヌ・ファクタル(Serigne Faktal)と呼ばれた。セリーヌ・ラムは各地域に配置され，中央権力と共同体の間で調整役を担った。とりわけ君主に対して反乱を起こした先のンジャンブール地域やジョロフやワロの境界にこのセリーヌ・ラムが重点的に配置された(Diouf 1990：95，Glover 2007：42)。これは，それまで各地域のラマンを中心に運営されていた共同体の自治を，ダメルの下に集約して中央集権的な体制を作ることに繋がった。アブドウライ・バ・ジョップによると，セリーヌ・ラムの職位を得たのは，モール系が多く，主人に命じられれば，イスラームで禁止されているはずの略奪や拉致なども行い，飲酒や暴力を行うこともあったという(Diop，A．B．1981：241－242)。対して，セリーヌ・ファクタルの多

くはマンディング系のイスラーム聖職者であった(Diop, A. B. 1981：236－240)。当然のことながら，セリーヌ・ファクタルとセリーヌ・ラムの折り合いは悪く，前者は後者を「腐敗したマラブー」と批判した(Glover 2007：42)。

次に，ウォロフの君主に対して，マラブー達が大きな反乱を起こすのは18世紀末である。前述のように1776年，フータ・トロでイスラームを掲げる強権国家が誕生し，トローベのウォロフ進出が目立ち始めたことが背景にある。フータ・トロのムスリムのウォロフ侵攻を受けて，ダメル・ティェンの座にあったアマリ・ンゴーン・ンデラ(Amari Ngoone Ndeela)は，カジョールを救うべく，領土内のムスリムを捕え，奴隷にした(Diop, A. B 2007：227)。これに対して，ンジャンブール地方のマラブー達も，フータ・トロの支援を受けて再度立ち上がり，強権的な君主に立ち向かうも，再び敗れ，容赦ない弾圧を受けることになる。しかし彼らの抵抗は続いた。例えば，1827年，ワロ王国で既に発生していた政府内の対立を利用して[29]，ニェーニョでもあるジル・ファティム・シャム(Diile Fatim Cham)がイスラーム革命に成功し，王政を倒している。また，このとき，ジルを支援したカジョールのマラブー，ンジャガ・イサ(Njaga Isa)とンジャンブール地方のマラブー達も，同年，カジョールでイスラーム革命を起こしている(Glover 2007：57－58，Diop, A. B. 1981：230－231)。しかし，どちらも，最終的には，セネガル交易への悪影響を恐れたフランス総督府によって鎮圧されてしまう。

17世紀から18世紀にウォロフ社会で発生したジハードの構図を単純化すると，フランスとの奴隷貿易で利益を得る為政者とその協力者，対して人民の奴隷化に反対するイスラーム聖職者という関係が浮かびあがる。しかし，それぞれの集団は必ずしも一枚岩ではなく，為政者や貴族内部でも，王位や利権をめぐってしばしば対立が表面化し，イスラーム聖職者の中にも，権力に擦り寄る者とそうでない者がおり，その立ち位置も状況に応じて変遷した。また，理由は何であれ，武力で信念を実現することに対して冷ややかなマラブーも少なくなかった。そして権力も武力も持たない者たちは，こうしたマラブーが統治するムスリムの共同体に避難し，ムスリムに改宗した。内部のアクター達が十分にまとまりきれない中で，北からはモール人が，東からはフータ・トロ・イスラーム国が，そして西からはフランスがそれぞれの思惑

でウォロフ社会に介入を行う。とりわけ，19世紀に入ると，フランスのセネガンビア地域への内部侵攻も始まる。次節では，こうした中，ウォロフ諸王国が崩壊し，人々がスーフィズムの聖者に救いを求めるに至るまでの過程を示したい。

II．３　19世紀：ウォロフ社会に対するフランスの侵攻とスーフィー教団の興隆

ヨーロッパ諸国は，15世紀から，セネガンビア地域の沿岸部と交易を行っていた。しかし，それは交易の拠点という「点」を便宜上確保しているにすぎず，現地の住民や土地を支配・統治するという意思を主体的に持つものではなかった。しかし，1814年のパリ条約締結後，フランスの西アフリカ進出が本格化する。当初は，フランス本国の政治体制が不安定であったこと，またセネガンビア地域の土壌や気候に適した換金作物がなかなか見つけられなかったことから依然として交易が中心であったものの[30]，1816年，サンルイにフランスの総督府がおかれ，徐々に内陸への覇権拡大に向けた行動が開始された。この動きは，1848年の２月革命で第二共和政が誕生して以降，いっきに高まる。この頃，セネガンビア地域で落花生生産が本格的に始まり，英国をはじめとする他のヨーロッパ諸国の動きもフランスの野心を後押しした。それを実際に力でもって実現したのが，1854年から1861年と，1863年から1865年までの２期約10年，セネガル総督を務めたルイ・レオン・セザール・フェデルブ(Louis Léon César Faidherbe)であり，最初にそのターゲットとなったのが，沿岸部，とりわけサンルイに近いウォロフのワロとカジョール，そしてバオルの３つの王国であった。

ウォロフ諸王国の中で真っ先にフランスの手中に落ちたのはワロ王国であった。ワロ王国は，1659年の時点で，フランス国王の特権会社カーボヴェルデ・セネガル会社に，毎年，国王であるブラクに慣習税を支払う条件でンダル(Ndar)島 —— 後のサンルイ島 —— を譲り渡した王国になる。このワロ王国は，18世紀から19世紀にかけて，イスラーム化が不十分であるとの理由で，幾度となくフータ・トロからジハードの攻撃を受けていた。そこで，19世紀初頭，ブラクは，サン・ドマング(現ハイチ)という重要な植民地を失っ

たフランスに，自ら進んで第二のサンドマングの役割を担うための土地の提供すら行っている。しかし，土地はやせており，かつ塩害の影響が大きかったため，その計画はとん挫し，フランスはセネガル川右岸でモール人が採集するアラビアゴムに新たな活路を見出した。このアラビアゴム交易で相応の利益を得るためには，モール人をうまく懐柔する必要があり，当初，ヨーロッパ商人たちは，各モール人の首長に慣習税を支払って交易を行っていた(Désiré-Vuillemin 1952：90)。また，モール人たちも，アラビアゴムの入手を望むフランスやアラビアゴム交易に携わる商人の足元を見て，できるだけ自分たちに都合の良い取引を行うための要求 —— 例えば取引場所(エスカル)を指定し，そこで商人達に値付け競争をさせて，好条件で売却する —— を突き付け，期待どおりでなければ，英国が取引を行うポルテンディックへゴムを持って行ってしまうなどの行動も見られた。モール人の横暴な振る舞いはワロ王国にとっても深刻な問題であった。とりわけハサニ(兵士)グループは，しばしば南下して黒人を拉致して連れ帰ったり，穀物を略奪するなど黒人社会を脅かす存在でもあった。そこで，1833年，ワロ王国のブラクは王女をトラルザの首長と結婚させて同盟関係を結ぶことを選択した。しかし，この結婚の結果誕生する子供がワロ王国の王位に就くことでモール人首長国トラルザのワロ王国支配に繋がることを懸念したフランスはこの同盟に激しく反対した。しかし，フランスの意向は聞き入れられなかったことから，フランスはワロとトラルザに派兵し，ワロ王国は大きな混乱に陥ってしまう。結局フランスがこの結婚を認める代わりに，この結婚によって生まれた子供がワロの王位に就くことはないという1853年の和平協定が締結されるまで，フランスのワロに対する攻撃は約2年も続き，国土は荒廃し，ワロの人々の生活を困窮化させた(Diouf 1990：145－146)。植民地政府やフランス商人が描くモール人は，例外なく野蛮で，残忍で，狡猾であった。しかし，他方で，モール人の間で広まっていたスーフィズムの一派カーディリー教団は，18世紀以降，交易や人の交流を通じて，ワロ王国，そしてウォロフ諸国に確実に浸透していった。

こうしたフランスの内部侵攻は，多くの不協和音を地域社会にもたらした。たとえば，1850年代半ば，セネガル川での商業利権をめぐるトラブルが原因

で，しばらく鳴りを潜めていたフータ・トロ・イスラーム国によるウォロフ諸王国に対するジハードが再開された。しかけたのは，フータ・トロ生まれのトロード，エル・ハジ・ウマール・タル(El Hajj Umar Tall)である。彼は，1820年代にメッカ巡礼を行った際に，アルジェリアで1780年代にティジャニー教団を設立したシェイク・アフマド・アル・ティジャニ(Cheikh Ahmad-Al-Tijani)の直弟子と知り合い，そこでティジャニー教団の教えを会得して，「ティジャニー教団の西アフリカのカリフ」の呼称を授けられた人物でもある。彼によって，セネガンビアに侵攻するフランスとそのフランスに懐柔されたウォロフの為政者に対する反乱が，セネガル川沿岸地域のイスラーム教徒たちに呼びかけられた。しかし，セネガル川交易の利権を守るべく内陸へ軍隊を派遣したフランスによって，ウマール・タルとその支持者は東へ追放されてしまう[31]。

ヨーロッパ人によるアフリカ支配に際して，一般的には，英国は既存の支配体制を利用する間接統治を敷いたのに対し，フランスは，独自に学校を整備して，みずからアフリカ人エリート育成するという直接統治を敷いたといわれる。しかし，フランスも，既存の制度や体制を利用して支配者層を懐柔，もしくはその支配者層と対立する勢力を統治機構のトップに据えて間接統治的な方法をとるという手段を用いなかったわけではない。そして，これはセネガル側の諸アクター間での対立や裏切りを喚起することにも繋がった。例えば，マラブーとウォロフの支配者層との間での対立が顕在化する中で，1860年のカジョール侵攻直前に，フェデルブは，ンジャンブールのマラブー達に，カジョールのダメルに対して反乱を起こすように働きかけを行っている(Glover 2007:62)。このとき，フランスと手を結ぶことに合意するマラブー達は，1859年に，「ンジャンブールの反乱」を引き起こしたが，全てのマラブーがそれに参加したわけではない。他方で，フランスにとって都合の良い人物を為政者に据えて，傀儡政権を打ち立てることもあった。前述のように，ウォロフ社会では，王位継承権を持つ者が複数存在し，その中から識者の協議によって王が選ばれることから複数の母系集団の間で争いが発生しやすい構造にあることも，こうした介入を容易にした。そしてそれがウォロフ社会の混乱を招いた。

例えば，カジョール王国の英雄ラット・ジョール(Lat Dior)が，1862年，20歳前後の若さでダメルに着任した頃，フランスは明確に王位継承に介入しており，気に入らないダメルを次々と交代させている[32]。ラット・ジョール自身も着任から2年も経たない1863年12月，フランスによってダメルの地位を追われた。これは，まさにガンビア川中流域にあった王国バディブ(Badibu)出身のマ・バ・ジャフ(Ma Ba Diakhou)―― 彼は先述のウマール・タルの影響を受けたティジャニー教団のマラブーでもあった[33]―― が，イスラームの教えに忠実ではないチェッドが事実上ウォロフ王国を支配していることを理由に，1862年にサルーム，1864年にバオル，そしてその翌年にはジョロフ王国に軍事進攻を行ってこれらの地域の支配とイスラーム化を試みたその渦中の出来事であった。フランスによってダメルの地位をはく奪されたラット・ジョールは，この混乱を利用してサルームに逃げ込み，マ・バに庇護を求めた(Coulon 1881：65)。このとき，ラット・ジョールは，マ・バの要求を受けてイスラーム教徒に改宗し，反フランスで連帯することを約束している(O' Brien 1971：31)。クーロンは，両者協力の背景には，打倒フランスで互いに相手を利用する思惑があったことを指摘する(Coulon 1881：65)。しかし，マ・バは，1867年に，シーン(Sine)王国で殺害されてしまう。そこでラット・ジョールは，マ・バと同じくフータ・トロ出身で，ジョロフ王国でジハードを行って支配者となったアマドゥ・シャイフ・バ(Ahmadou Cheikhou Ba)と協力することを選択する。しかしながら，1871年，フランスがラット・ジョールをカジョールのダメルに再び迎えるという提案を行うやいなや[34]，ジョールはフランスに協力することを選択し，1875年，アマドゥ・シャイフを殺害してしまう。ラット・ジョールの日和視的な行動はその後も続く。折しも，1870年代後半に，フランスはセネガルの鉄道建設計画を考えていた。1875年にゴレ島からダカールに行政機能が移され，そのダカールと総督府のあるサンルイを結ぶ鉄道は，19世紀後半から本格的に生産が始まった落花生を港まで運ぶためにも不可欠なインフラと期待された。そこで，フランス植民地政府は，1879年，ラット・ジョールとの間で，フランスが併合していた土地をカジョールに返却する代わりにカジョールに鉄道を建設することを認めさせる協定を結んだ。しかし，協定締結後にジョールは考えを翻し，落花生の植

え付けをボイコットするよう働きかけ，鉄道建設反対運動を展開した。フランスとジョールの協力関係は破綻し，ジョールは再びダメルの地位をはく奪され(1882年)，そして1886年10月，フランスによって殺害されてしまう。クーロンは，ラット・ジョールのこれら守備一貫しない行動について，彼の子孫の言葉を用いながら「彼はムスリムであったが，それ以前にナショナリストであった」と解説する(Coulon 1881：65)。己の領土を守るためなら手段を択ばないと考えれば，国を守る美談にもなりうる。そして，ラット・ジョールは，植民地支配に最後まで抵抗した英雄として，セネガルの人々から現在でも敬意を払われている。

ラット・ジョールのこうした日和視的な振る舞いは，ウォロフ社会が，フランスとイスラームの間で揺れ動く姿とも重なる。イスラーム聖職者，ウォロフの貴族層，そしてチェッドなどが反植民地のスローガンの下で一致団結することは決してなく，中にはフランスと協力することで多くの利益を得る集団もいた。結果的にそれぞれが敵とみなす人々の村を襲い，焼き討ちが頻発した。結局，ワロは1855年に，カジョールは1886年に，そしてバオルは1894年に王国が崩壊し，フランス領となった。最後まで激しく抵抗したジョロフ王国のブール，アルブリ・ンディアイ(Alboury Ndiaye)も19世紀末にこの世を去ることを余儀なくされた。この間，ウォロフ社会内部の権力闘争とも重なり，国土は荒れ，飢饉や黄熱病も発生した。こうした中で，人々が救いを求めたのがスーフィー教団の聖者であり，中でも植民地支配に無暴力で抵抗することを説いたセネガル発祥のムリッド教団の創始者，シェイク・アマドゥ・バンバ・ンバケ(Cheikh Ahmadou Bamba Mbacké 1853－1927)は多くの人々を惹きつけた。

特記・謝辞

本稿を作成するにあたり，ウォロフ語，アラビア語の英仏表記および人名に悩まされた。参照とする文献によって表記が異なる上に，それをカタカナでどう書き表すかが大きな課題となった。ウォロフ語の一部については，砂野幸稔教授(熊本県立大学)に御指導いただいた。ここに記して感謝の念を表したい。ただし，筆者の思い込み等から不適切な表記が残っている可能性も

否めない。また図３は海外の研究者を意識してあえて英語で作成した。

本研究は科学研究費補助金(種目 基盤研究A　細目　経済理論　課題番号23243033，研究課題 “中間組織の形成過程と経済的機能:アジアとアフリカに関する歴史的・理論的研究” 研究代表者：寺西重郎教授(日本大学))の補助を受けて実施された研究である。

1）セネガル人は，こうした行動をしばしばフランス語で，tapper les portes(扉を叩いて開く)と表現する。

2）ユーロ危機が深刻な2012年現在，CFAフランがペグするユーロの価値は凋落気味であるため，現在のレートはあまり参考にならない。通常時の感覚としては，CFAフラン表示の額面を５で割った値が日本円相当の金額の目安となることから本稿でもそれに基づいて算出している。

3）この刑法第245条では，「18歳未満の未成年に物乞いをさせたものに３か月以上６か月以下の懲役」とされるなど，量刑においても2005年に制定された法律と整合性はとれていない。Ministère de la Justice du Sénégal (2008), *Analyse et Plan National d' Action de lute contre la traite des personnes, en particulier des femmes et des enfants*参照。

4）Lewis, W. Arthur (1954). "Economic Development with Unlimited Supplies of Labor." *The Manchester School*, Vol. 22, pp. 139－191をはじめとする，一連の２重経済モデル研究。

5）書籍としてまとまったものとしては，古くはO' Brien (1971)，Coulon (1981)が挙げられるが，それぞれ英国とフランスの研究者によるものであり，欧米人の目からわかりやすくまとめられている。しかし，そうであるがゆえに，実態を単純化しているとの批判もないわけではない。同じ欧米人によるものであるが，2007年に刊行されたGlover (2007)では，こうした問題を解消しようとの努力が見られる。セネガル人によるものとしては，ペンシルベニア大学で教鞭を執るBabou (2011)が新しい。これは2007年に英語で書かれたものの仏語版であり，はしがきによると，オリジナル版に若干の修正が加えられているようである。バブー自身もムリッド教団の信徒であることもあって，筆者がアメリカのムリッド関係者にインタビューしたところ，これまでの欧米人によるものに比べて高い評価がなされてはいるが，欲をいえば，アジャミ(Ajami：アラビア文字を用いて表記されたウォロフ語)文献をもっと参照して欲しかったとの声も聞かれた(2012年７月，ニューヨークにて，筆者がムリッド信徒に対して行ったインタビューより)。ムリッド教団内部では，優れたアジャミ文献が豊富にあるという。これ以外に，続編で紹介したいが，大学の学位論文として提出されたものの中に参考になる文献も多い。

6）2012年ユネスコの世界遺産に指定されたチャド共和国のリビア国境域にみられるウ

ニアンガ湖群は，まさにサハラ砂漠の中に形成された湖群で，水が豊富であった時代の遺産とされている。

7）同様に，ブルックスは，マンデ世界は，自由民，職人，奴隷の3カテゴリーで形成されており，こうした生業，職能の分化は，同一空間内での交換を促したという(Brooks　1993：46－47)。

8）シンクレティズムとは，「起源の異なる2つ以上の宗教が融合して新しい宗教体系を創出すること，そこまで行かなくてもそれらが併存して崇拝の対象になっている状態を指す」(大塚　2004：100)と説明される。これに対して，西アフリカのイスラーム研究の第一人者であるレヴツィオンは，マリ帝国のイスラームのあり方を，「シンクレティズムではなく，イスラーム的要素と伝統的要素で形作られるものでもなく，むしろイスラーム的要素と伝統的要素が隣り合って併存するデュアリズムである。これら2つの文化システムは，抽象的に存在するのでなく，帝国内の2つの社会グループによって表象されるのである(Levtzion 1973：198)」と表現している。

9）ただし，このタクルール地域に複数存在する王国のひとつにも「タクルール」という国があり，さらにその国の首都の名前も同名であったことから，この「タクルール」が示す言葉の扱いには注意が必要である。ここでは，ウォロフ地域北東部に接するセネガル川中流域から上流にかけて興隆した地域を指す。

10) Stride and Ifeka (1969), p. 20.

11) 坂井(2003)によると，ガーナ帝国がムラービトたちに征服されたのは，1076－77年という(83頁)。

12) デナンケ王朝が設立された年については諸説ある。この点について西アフリカ史研究の権威でもあるロビンソン，カーティン，ジョンソンが共同で詳細な検討を行い，試論を展開しているが，1495年以前もしくは1512年以降という結論となっている(Robinson et al. 1972：557)。

13) 私市(2004)では，さらに，13世紀の時点で，黒人がタッカーダの鉱山を開発して，銅の生産を開始したこと，織物の輸出が開始されたことをマリ帝国の繁栄の理由に挙げている。

14) 中東やヨーロッパの金価格を暴落させたマンサ・ムッサのメッカ巡礼の話は広く知られている。このように，中東でもイスラーム国として認知されていたマリ帝国においても，コーランの教えからはとても容認することのできない慣習，具体的には，女性が裸に近い状態で人前に出ること，死肉や犬，驢馬を食べることなどが広く流布していることを，アラブの探検家イブン・バトゥータ自身が著書『大旅行記』で指摘しているという(苅谷：2012b，52－55)。

15) 苅谷(2012)では，アスキヤ・ムハンマドの跡を継いだ息子アスキヤ・ダーウードが，敬虔なイスラーム教徒でありながら，同時に，現地宗教にのっとった儀式を執り行うことで，イスラーム以外の「現地宗教」を重んじる人々を取り込む術が明らかにされている(58－59)。

16) Ohaegbulam (1990) は，旧勢力においては，支配者層，軍人，財政担当官の間で権力闘争があったこと，北アフリカ勢力においては，宿敵トアレグ族との緊張関係，距離の遠さを理由に挙げている。
17) 同様のことは，現在のアルジェリア南部のトアレグ族とアラブ人の間でも顕著に観察されたという (Hall 2011：56－57)。
18) 詳細は，拙稿 (2006) (2007) を参照頂きたい。
19) ただし，マリック・シイの反乱をジハードと認定するには，まずはイスラームの掟にそった方法をとらなければならないが，その条件を満たしていないという指摘もある。そもそも，イスラームは，他の宗教を信じることに寛容であり，ムハンマド自身も，異教徒が税 (jizya) を払ってイスラーム圏に住むことを認めていた。したがって，聖戦を行うにあたっては，まずは異教徒をイスラームに改宗させるよう働きかけ，そうでないならば，税を払ってそこに滞在する赦しを求めさせる必要があるのだという (Gomez 1985：548)
20) アルマニとは，イマームに冠詞がついたal imamが派生した語であり，理想的なイマームを意味する。クーロンによると，スレイマンの述べる理想的なアルマニの条件は，①博学であること，②在任中に富を増やさないこと，③強情な人物でないこと，④世襲制でないこと，⑤出自の民族にはこだわらない，⑥勤労を厭わないこと，⑦適性をもつことの以上7点を満たす人物という。フータ・トロ・イスラーム国は，フランスに滅ぼされる1890年まで114年続いたが，その間，アルマニは53代も誕生している (Coulon 1981：18－20)。
21) 余談になるが，セネガルと付き合っていると，どういうわけかコンゴ民主共和国とのつながりの強さを感じさせられることがある。このシェイク・アンタ・ジョップの研究によると，現在のコンゴ民主共和国からセネガルに移り住んできたリネージが非常に多いことを特記しておく。
22) この点については，Diouf (1981) に詳しい解説がなされている。
23) ジュフによると，セーニュは，18世紀，フタからやってきた同業者との競争に敗れて，現在のウォロフ社会には存在しないとの指摘もある (Diouf 1990：46)。
24) 例えば，ウォロフ社会のカーストを巡る議論を整理したジュフは，王の奴隷 (jaami-buur) などは，異なる社会階層に属する者と婚姻関係を結んでいることから，“jaam-ñeeño”というカテゴリーが存在するのであれば，それに属する集団を除くすべての奴隷 (jaam) はゲール (géér) と扱ってよいと主張する (Diouf 1981：35)。彼が1990年に公刊した書籍でも，ジャームの地位は主人のそれに連動することからゲールとされている。したがって，セネガルの社会構造を一元的に一つの階層構造に入れて理解することは困難であることが主張されている (Diouf 1990：54)。
25) ウォロフ伝統社会の貴族階級では，交叉いとこ婚を通じて，限られた数の氏族間で世代を通して婚姻関係を結ぶことが繰り返されている。交叉いとこ婚とは，父の姉妹の子供，もしくは母の兄弟の子供との結婚のこと。交叉いとこ婚に対峙する言葉

に平行いとこ婚(父の兄弟の子供,もしくは母の姉妹の子供との結婚)がある。ただし,ジョロフ王国ではこうした世襲システムは早くに消滅した。

26) 7つの母系は,歴史上に名を残すダメルの母親や妻を起点に生まれている。王家の母系集団は誕生の古いものから,Wagadu,Muyoy,Soño(以上,1550年から1673年までの間に誕生),Gelwar,Dorobe,Bey(以上,1673年から1693年までに誕生),そして,1693年以降に生まれたGeejの以上7系になる(Diouf 1990: Annex I)。苅谷(2012a)によると,ファール家にも厳密には3つの系が存在し,互いに対立していたという。

27) 家内奴隷については,小川了(2002)が詳しい。

28) この点については,独立期にセネガルを代表する知識人かつ政治家シェイク・アンタ・ジョップも,身分が上位のものが下位の者に対して物的に搾取することはなかったと主張する(Diop, C. A. 1987:12)。

29) グローバーによると,当時,フランスがワロ王国に支払う慣習税の集め方をめぐって,貴族とチェッドが対立し,暴力が途絶えることがなかったという(Glover 2007:57)。

30) フランスは,綿花,ゴマといったさまざまな食物の生産を試験的に行い,セネガンビアの土壌と気候に適した作物を見出すことに勢力を傾けた。

31) もっとも,これは結果的に,ウマールのセグー侵攻とバンバラ支配,そして現在のギニアからセネガル,そしてマリに跨る一大トゥクルール(Toucouleur)帝国誕生に繋がった。トゥクルール帝国を継承した息子のアマドゥ・タル(Ahmadou Tall)もフランスのセネガンビア内部侵攻に対して大きな壁として立ちはだかった。フランスがバンバラの支援を得てセグーを奪取し,事実上トゥクルール帝国を破滅させるには1890年代まで待つ必要があった。

32) 例えば,モンテイユでは,1855年から59年にかけてダメルの地位にあり,ラット・ジョールの兄であるビルマ・ンゴネ・ラティール・ファル(Birma Ngoné Latir Faal)の死後,官僚であるジャンブールが決めた次の王位継承者を巡ってフランスと諍いが発生し,結局,フランスの意向を聞いて1861年に,マ・ジョジョ (Ma Jojo Jegen Kodu Faal)がダメルになるも,今度は王侯奴隷が納得せず,20歳になるか否かのラット・ジョールにその役目がまわってきたことが説明されている(Monteil 1963:91)。

33) Diouf(2001), p.116に基づく。

34) クーロンは,フランスが再度ラット・ジョールをカヨールのダメルに据えた背景には,1870年の普仏戦争のためにセネガルに常駐していた軍隊をヨーロッパに戻す必要があったことを説明する(Coulon 1881:66)。

参考文献

Babou, A. (2011). *Le Jihad de l' âme*. Paris, Karthala.

Barry, B. (1998). *Senegambia and the Atlantic slave trade*. Cambridge, U. K. ; New York, Cambridge University Press.

Brooks, G. E. (1993). *Landlords and Strangers: ecology, society, and trade in West Africa, 1000−1630*. Boulder, Westview Press.

Coulon, C. (1981). *Le Marabout et le Prince*. Paris, Editions a. Pedone.

Curtin, P. D. (1984). *Cross-Cultural Trade in World History*, Cambridge University Press.

Davidson, B. and F. K. Buah (1977). *A history of West Africa, 1000−1800*. London, Longman.

Diop, A. B. (1981). *La Societé Wolof: Tradition et Changement*. Paris, Karthala.

Diop, C. A. (1987). *L' Afrique Noire Précoloniale. Etude compare des systèmes politiques et sociaux de l' Europe et de l' Afrique Noire, de l' Antiquité à la formation des etats modernes*. Paris, Présence Africaine.

Diouf, M. (1981). "Le problème des castes dans la société wolof." *Revue Sénégalaise d' Histoire*. 2 (1) : 25−37.

Diouf, M. (1990). *Le Kajoor au XIX siècle: pouvoir ceddo et conquête coloniale*. Paris, Karthala.

Diouf, M. (2001). *Histoire du Sénégal: le modèle islamo-wolof et ses périphéries*. Paris, Maisonneuve & Larose.

Désiré-Vuillemin, G. (1952). "Un commerce qui meurt : le commerce de la gomme dans les escales du Sénégal." *Les Cahiers d' OutreMer*. 5 (17) : 90−94.

Glover, J. (2007). *Sufism and jihad in modern Senegal: the Murid order*. Rochester, NY, University of Rochester Press.

Gomez, M. (1985). "The problem with Malik Sy and the Foundation of Bundu." *Cahiers d' Études Africaines*. 25 (100) : 537−553.

Hall, B. S. (2011). *A history of race in Muslim West Africa, 1600−1960*. Cambridge ; New York, Cambridge University Press.

Isichei, E. A. (1997). *A history of African societies to 1870*. Cambridge, Cambridge University Press.

Lapidus, I. M. (2002). *A history of Islamic societies*. Cambridge ; New York, Cambridge University Press.

Le Roy, E. (1982). "Mythes, violences et pouvoirs : Le Sénégal dans la traite négrière." *Politique Africaine*. 2 (7) : 52−72.

Levtzion, N. (1973). *Ancient Ghana and Mali*. London, Methuen.

Lipschutz, M. R. and R. K. Rasmussen (1986). *Dictionary of African historical biography*. Berkeley, University of California Press.

Mikaberidze, A. (2011). *Conflict and conquest in the Islamic world : a historical encyclopedia*. Santa Barbara, Calif., ABC－CLIO.

Monteil, V. (1963). "Lat Dior, Damel du Kayor, et l'islamization des Wolofs." *Archives des sciences sociales des religions*. (16):77－104.

O'Brien, D. B. C. (1971). *The Mourides of Senegal: the political and economic organization of an Islamic brotherhood*. Oxford, Clarendon Press.

Ohaegbulam, F. U. (1990). *Towards an understanding of the African experience from historical and contemporary perspectives*. Lanham, Md., University Press of America.

Ogot, B. A. and Comité scientifique international pour la rédaction d'une Histoire générale del Afrique (1999). *L'Afrique du XVIe au XVIIIe siècle*. Paris, UNESCO.

Robinson, D., P. D. Curtin, et al. (1972). "A Tentative Chronology of Futa Toro from the Sixteenth through the Nineteenth Centuries." *Cahiers d'Études Africaines*. 12 (48):555－592.

Searing, J. F. (2002). "*God alone is king*" : *Islam and emancipation in Senegal* : *the Wolof kingdoms of Kajoor and Bawol, 1859－1914*. Portsmouth, NH, Heinemann.

Siré Abbâs, S. (1913). *Chroniques du Foûta Sénégalais*. Paris, E. Leroux.

Stride, G. T. and C. Ifeka (1971). *Peoples and Empires of West Africa: West Africa in History 1000－1800*, Nelson.

Wiesner, M. E. (2005). *An age of voyages, 1350－1600*. New York, Oxford University Press.

大塚和夫(2004).「イスラーム」, 関一敏・大塚和夫編『宗教人類学入門』. 弘文堂.

小川了(2002).『奴隷商人ソニエ ―― 18世紀フランスの奴隷交易とアフリカ社会』. 東京, 山川出版.

カーティン, フィリップ(2002).『異文化間交易の世界史』. 東京, NTT出版.

苅谷康太(2012a).「19世紀後半における西アフリカのイスラームと王権　アフマド・バンバの政治権力観とその思想的連関網」『アジア・アフリカ言語文化研究』(83): 59－88.

苅谷康太(2012b).『イスラームの宗教的・知的連関網』, 東京大学出版会.

私市正年(2004).『サハラが結ぶ南北交流』. 東京, 山川出版社.

坂井信三(2003).『イスラーム商業の歴史人類学:西アフリカの交易と知識のネットワーク』. 世界思想社.

正木響(2006).「19世紀フランス商人の西アフリカ進出とセネガル社会(1)」『金沢大学経済学部論集』. 第26巻第2号.

正木響(2007).「19世紀フランス商人の西アフリカ進出とセネガル社会(2)」『金沢大学経済学部論集』. 第27巻第2号.

総合型地域スポーツクラブへの障害者受け入れのためのクラブマネジメント

―― 専門的指導者の配置と財源の両立 ――

奥　田　睦　子

Ⅰ　問題の所在と目的
Ⅱ　研究の視角と手順
　1．研究の視角
　2．研究の手順
Ⅲ　総合型地域スポーツクラブへの障害者の参加のしくみの試案
　1．総合型地域スポーツクラブの財源構造
　　(1)　事業型非営利組織の財源構造
　　(2)　総合型地域スポーツクラブの財源構造
　　(3)　障害者の受け入れに適した財源の特徴
　2．ドイツにおける医療保険制度を活用したしくみの特徴
　　(1)　社会保険制度への着目
　　(2)　ドイツにおける医療保険制度活用のクラブマネジメント上の意義
　3．専門的指導者の配置と費用負担
　　(1)　社会的制度の活用
　　(2)　社会的制度としてのガイドヘルパー制度
Ⅳ　まとめと今後の課題

Ⅰ　問題の所在と目的

1995年からスタートした総合型地域スポーツクラブ事業(以下,総合型クラブまたはクラブと表記)において総合型クラブは,地域住民の誰もが気軽にスポーツに参加できる場であると共に，希薄化する地域住民のコミュニケーションの場としても機能することも期待されている。総合型クラブがこのよ